

第二期 第九十八号

(初版) (無料)

音信不通

2024.09.10 定有堂書店 発行

『町の本屋という物語』読書会

「本のある場所」日記 二〇二四年八月

航海簿明 — 洋上での「転向」(九)

今昔、感動物語

鳥取が好きだ。

I am the Resurrection

本を作る側から (18)

汽水のほとりから (42)

カレーとコメ不足

大きな葛籠・小さな葛籠

鳥取あれこれ その九十七

内坪井町日記 (4)

それはドラマの話？

夏のいきものがかり

岩田直樹 再解釈論

二案内

奈良 敏行

南陀楼綾繁

岩田 直樹

木元 健二

山下 篤美

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

奈良 敏行

ドラメリア

『町の本屋という物語』読書会

奈良 敏行

(定有堂 主人)



八月八日(二〇二四)に県民文化会館小会議室で『町の本屋という物語』定有堂書店の43年『の読書会があった。

最古参のお付き合いの浜田浩之さんの企画・報告だった。参加者は二十人。

わたしの方針は「書くけど語らない」だったが、浜田さんが正面に席を用意してくれたせいで、質疑応答の形になった。しかし一貫して聞かれたことにしか答えなかったので、「語ったけれども語らなかつた」ということに変わりはなかつた。

浜田さんはA4用紙6頁にわたる資料を用意していた。心に留まった部分の抜き書きだ。じつはわたしも事前に「定有堂オブセッション その2」という抜き書き冊子を配布していた。わたしは「本は売るが本は書かない」という生き方だった。とくに理由は無いのだが、本を売るのが楽しくてそれ以外はいつでもよかつたからだ。巡り合わせて三砂慶明さんが本にまよめてくれたが、自分事とは思えなかつた。そ

れでも興味深く読んだ。それは楽しかった。わたしは「書く人ではなく読む人」なのだ。読んで興味を示したところについてものように傍線を引いた。思いがけなくたくさん引いたのでうれしく、その部分だけを抜き書きして冊子を作った。それが「定有堂オブセッション その2」だった。わたしの魂の受け皿はいつもそのようなにして小冊子として定在するのだった。A5で20頁。しかもそれに黄色のマーカーで記憶を圧縮し「ころ」に安らぎを得た。

参加者の方々は定有堂との触れ合いの記憶を語ってくれた。わたしも同じ記憶を重ね合わせた。

浜田さんはふり返って、「本屋を始めるときには断念するものがあつたんだね」と深部に触れてくれた。そしてその「断念」とランボオが精神史の中では関わっていたんだね、とも理解を示してくれた。ずいぶん昔になるが、浜田さんはランボオ詩集のフランス語朗読テープをくれたことがあつた。その頃はフランス語のレッスンを聴きながらいつも店頭で現れた。なつかしく思い出した。「断念しなければできないような本屋だった」とわたしは続けた。いま本屋をはじめめる人は何を「断念」しているのだろうか？ そのようには見えないし、その必要もないのだろうか。

「断念」と「始める」、この二重構造がわたしの個性だった。松田裕史さんは「この本を読んでいると同義性概念がくり

返し出現してくるのが印象的だった」と発言した。その入口がそこにあつたのかも知れない。松田さんはいう。実存が両義的になっている。遅れると売れるの矛盾。オブセッションの固定観念と生成変化。「淡雪」と「沫雪」の入れ子構造。そんな両義性が定有堂の魅力だし、終わってもずっと続いていく理由がそこにあるのかもしれない。わたしの中の両義性、このことは所を変えて考えていきたい。ありがたい示唆だった。

会場には定有堂の閉店に間に合わなかった二十七歳の男性もいた。間に合った人の記憶はどうしても表層的なものになる。でも間に合わなかった人の中の「定有堂」はその人の未来につながる刻印となる。四十三年過ぎたその次の十年はどうなる？ と岩田直樹さんが問いかけた。同じ問いを三砂慶明さんにうながされて、「これからの十年」というエッセイを、やがて刊行される『本屋のパンセ』に書いたと述べた。

定有堂ビル二階の本屋「SHEEPSHEEP BOOKS」の高木善祥さんは、後に感想を寄せてくれた。

《みなさんがそれぞれ定有堂に出合ったタイミングが違うので、定有堂にあつた「余白」を、私も含め皆さんがそれぞれの言葉で埋めていつているように感じました。》

その通りだと思った。定有堂教室の中心の岩田直樹さんは、概念的にしっかりとめてくれた。

《定有堂書店は物理的には境界が存在する完結した場（ビジネスの場でもあります）なのですが、その「外部」に「青空」を求めることによって、定有堂は「書店」を超えて、人々をつなぐ「あいだ」となった。現在進行形で「あいだ」は形を変えながら存在しつづけている》

高木さんの「余白」とこの「あいだ」、松田さんの「両義性」とこの「外部」、これは同じ事を見据えていると思った。付き合いの深さにもなう読みの深さだった。

「断念」したけれどしきれなかった何かが常に「外部」として本屋に陰影を落としました。それは結局いいことだった。「余白」「あいだ」、それは断念の襲だった。

この読書会での気づき、それは「両義性」だった。この言葉を与えられたのはとても幸いな事柄だった。生成変化を駆動するのはいつも外部の声だ。この「両義性」もそうだった。遠くのある本屋さん、この本には読書する人だけが見ることのできる「青空」を信じつづける「気概」が躍動している、という意味のことを語ってくれていた。

結局、読書する人だけが見ることのできる「青空」が存在すると信じつづける「気概」が、この本の「核心」だったと思いつつた。

2024.08.14

奈良敏行 十三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円

46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2

岩田直樹 著

『宇沢弘文「社会を治す」

社会的共通資本の再解釈』

二〇二四年七月二九日発売

岩田直樹 著

『橋田邦彦・現象学・アーレン

トの再解釈―生活世界における

公共性と倫理―』小取舎

2023 一八〇〇円



「本のある場所」日記 二〇二四年八月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

7月27日

文京区春日の〈地域連携ステーション フミコム〉で、ZINEづくりワークショップ。

千石で毎年秋に開催する一箱古本市「千石ブックメルカード」のイベントとして、2022年から開催している。毎回、会場や回数などを変えながら、一番いいかたちを探ってきた。

3年目の今回は15名が参加し、1日で4時間行なった。参加者の集中力が持つのかと心配したのだが、やってみると全員の熱気がすごくて時間が足りないほどだった。いつものことだが、本や雑誌をつくる経験のない人たちが、よくこんなに面白いアイデアを思いつくものだと感じる。今回の会場にリソグラフの機械があり、それを使って用意したペーパーを印刷したことも、つくりたい出版物のイメージを固めるのに役に立ったのではないか。

この種のワークショップは10年以上、各地で行なってきた。自分一人で講師を務めることが多いが、誰かがスタッフとして参加してくれると、全体に目が届きやすくなる。千石ブックメルカードでは、ライターの猪俣貴寛さん、デザイナーの宮崎希沙さん、イラストレーターのMIOさんという私よりも若い世代のスタッフがいるので、私はだいぶ楽だ。

それでも4時間喋りっぱなしで、終るとぐったり疲れる。参加者のみなさん、お疲れ様です。終わってこんなにやくえんまの〈遠州屋〉でスタッフ打ち上げ。ここは名店なり。

8月中旬

長い分量の原稿を書く日が続く。大量の資料が必要となるので、事前に取っておいたコピーを読み込みつつ、近くの区立図書館でも本を取り寄せる。

私のマンションは、北区の図書館まで歩いて30秒、文京区の図書館まで自転車です分という好立地にある。それに最近の図書館は、OPACで予約を入れると早ければ当日中に資料が届くのがありがたい。

これらの資料は通読する必要はなく、知りたいことの記事があるかどうか、あるいはこの年号が正しいかどうか、確かめられれば、用は済む。だから、大量に取り寄せても、

閲覧席でざっと一覽し、必要部分をコピーすると返却するので、カウンターの職員に変に思われぬかが気になる。近年、公立の図書館司書の待遇の悪さが話題になっただけに、無駄な作業をさせているようで、後ろめたい気持ちになる。

それでも、これらの作業を着実にこなしていけないと、安心して原稿が書けないのも事実だ。自宅にどれだけ多くの蔵書があっても、必要な本を持っているとは限らず、持っただけでも出てこないことが多い。だから、図書館とそこで働く人たちにはいつも感謝している。

8月17日

朝8時に出て、日比谷の〈T.O.H.Oシネマズ〉で、久野遥子・山下敦弘監督『化け猫あんずちゃん』を観る。他の館での上映期間が終わったからだろうか、朝の1回目なのに、ほぼ満席だった。

実際に撮影した映像をトレースする「ロトスコープ」という手法による効果なのだろう、リアルとファンタジーのあわいのような画面のなかで、田舎の町で暮らす少女と化け猫の冒険譚を楽しんだ。

個人的なキャラがたくさん出てくるなか、「勉強しすぎた馬鹿になった」よっちゃんがいましろキャラ全開で愛し

い。鈴木慶一の音楽もよかった。

8月19日

霧島兵庫『静かなる太陽』（中公文庫）読了。義和団の乱によって北京に各国公使館が籠城し、清軍が攻撃した北清事変を描いた歴史小説。2021年に文庫化されているが、いまになって読んだのは、同じ著者の新作『ソコレの最終便』（ホーム社）が面白かったから。終戦時の満洲で特命を受けた装甲列車が目的の地まで走る、タイムリミットもの+鉄道小説。なお、同作から名前を本名の野上大樹に改名している。

主人公の柴五郎は、会津藩の子息で、戊辰戦争で敗れたのち下北半島の斗南に流され苦汁をなめる。山田太一脚本の大河ドラマ『獅子の時代』の平沼銃次（菅原文太）には、柴五郎がかなり反映されている。モリソンは中国通のイギリス人ジャーナリストで、彼が集めた資料をもとにできたのか東洋文庫だ。この二人がともに籠城軍にいたことを、この小説ではじめて知った。

航海薄明 — 洋上での「転向」(九)

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・「読む心」講師)

七 すべては夢の中だったのか

四十年経った今でも、年に数回は思い出す光景がある。

西太平洋上の船上、前方デッキで右舷進行方向をワッチしている。天気は快晴で海上はベタ風。ヨンパー・ワッチの最中だから早朝だろうか。周囲が二、三キロほどの平たい小島に近づき、船は左に舵を切る(取舵、ちなみに右に舵を転じるのは面舵)。白砂の海岸で遊ぶ子どもたち、赤ちゃんを抱いてあやしている母親たち、網を繕ったり船を漕ぎ出そうとする漁民たちの姿が間近に見える。顔の表情もはっきりわかるから、島と船の距離は百メートルもないだろう。思い浮かべるたびに心が洗われる気がする。

船を降りてから数年の間は、現実に見た景色だと思ひ込んでいた。しかし冷静に考えてみると、四千トン近くある喫水の深い船が、島民の顔を肉眼で判別できるほどに接近すれば座礁してしまうだろう。夢の中の話に過ぎない。そうはわかっている、不思議なことにも何度も白昼夢のように脳裏に映し出されるのである。

薄明(はくめい、twilight)は日の出の直前、日の入りの直後に大気中の塵の散乱によって生じる気象現象である。少し蘊蓄を傾けてみよう。とはいっても細かい数値はネット検索しての知識に過ぎない。

薄明は地平線(水平線)と太陽の中心との角度によって三つに分類される。市民薄明(常用薄明、第三薄明、Civil twilight)、航海薄明(第二薄明、Naval twilight)、天文薄明(第一薄明、Astronomical twilight)である。聞き慣れない名称だろうが、日の入りを例に説明するとわかりやすい。

市民薄明は日没後三〇分程度でまだまだ明るい。黄昏(誰そ彼)の時間帯だ。それから約三〇分たつと航海薄明と呼ばれる。海面と空との境が見分けられる明るさである。太陽高度はマイナス六度から一二度。日没後一時間半で天文薄明になる。六等星までを肉眼で見分けられる。太陽高度はマイナス一二度から一八度。

カメラが趣味の人は、マジック・アワー(magic hour)に好んで撮影するかもしれない。日の出前、日の入り後の数十分、太陽光が日中より淡く温かみがあつて空が金色に輝く時間帯である。さらに、市民薄明で空が濃い青

になる時間帯をブルー・アワー (blue hour) と呼ぶ。蘊蓄はここまでにしよう。

第一、第三の命名が想定している日の出は上述の逆になる。ヨンパー・ワッチは生活が不規則になって体調を維持するのが難しい任務だったが、大きな特典があった。何一つ遮る物のない大海で三種類の薄明の移行をじっくり眺められること、「光の輻 (や、spoke)」が生まれ消えていく絶景を目の当たりにできることであった。

航海の間、激しい雨が降った記憶がない。ほぼ毎日のように水平線に太陽が昇るのを眺めていた。「自転車のスポークのように」と表現すると美しさが減じるように思えるが、海面に水平線上の一点から無数の「輻」が放射線状に拡がり、そのうちの一本が私を照らす。

どこで見たのか思い出せない情景がある。グアムからパラオへ向かう途上だったのだろうか。拙著『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈』(二〇二三年) から引用しよう。

早朝のワッチ (見張り) でただ一人甲板に立ち、「筆舌に尽くし難い」という月並みな表現でしか言い表すことのできない荘嚴な日の出に感嘆しながら、広大な太平洋の上に私しか存在しないという孤絶感、しかし心安らく地球

との一体感を抱くとき、神秘的な至高感にとらえられるのであった。船上で私はユング (1875-1961) を読んでいた。そこに描かれる人類の心の進化の歴史と、地球の四十五億年にもわたる進化の歴史とが似通っていることにふと気づき、人間に関する学問を学びたいと考えるようになった (一一頁)。

それにしても「月並みな表現」を羅列した拙い文章である。作家のような表現力を持ち合わせていない私には、これが精一杯だ。

航海前はベルクソンを読んでいた。『創造的進化』や『道徳と宗教の二つの源泉』で描かれる物質と精神の進化は、理系頭には「青天の霹靂」だった。航海中はユング分析心理学については何を読んでいたのか。河合隼雄『ユング心理学入門』(培風館、一九六七年)、ユング『人間と象徴』(全二巻、河出書房新社、一九七五年) は記憶に残っている。英語の勉強のために、『Answer to Job (ヨブへの答へ)』『Synchronicity (共時性)』を船に持ち込んでいたのかもしれない。

四〇年前の出来事は、今ではすべてが夢のようだ。確かなのは、地球物理学を学んでいた私が人間の学問を「学ばなければならぬ」と決意したことであった。

今昔、感動物語

木元 健二

(新聞記者)

奇跡、超絶、号泣。ネット上にぎやかな言葉が飛び交っている。スルスル文字が流れるせいとか、何かうたうのものにも、いささか「盛る」ことが欠かせないかのようだ。

なかでも目立つのが「感動」である。感動を与えられるような試合に、とアスリートが語ることも珍しくない。パリ五輪が開催されたせいでそう感じるのかもかもしれない。

ただ、感動というものは受け手の心の動きによるものだ。それを「与える」という動詞で語られることに、どうもひっかかる。すこし視線が高くありませんか、とつぶやきたくなってしまう。そもそも私のような五十代半ばのすれっからしになると、感動の氾濫にはのみ込まれないゾ、とつぶねているところがある。

かつて、勝負に挑む者は「全力を尽くすだけ」とか「結果は後からついてくる」といった言い回しにとどめたものだ。どんな分野でもそれが普通だった気がする。

私が勤めている新聞社は夏の高校野球を主催している。そして感動の舞台として語られるのも高校野球である。今の風潮にひっかかりをおぼえつつ、あおるような伝え方をしてこなかったかというところ、決してそんなことはない。

暑苦しい感動物語は若い時から好きではなかったが、球児に心が揺さぶられた経験は確かにある。ただ、今よりもっと拙くて、きちんと書けなかっただけである。

物語は選手たちの戦いが一回性に尽きる、ということから生まれる。諦めたら終わり、という張り詰めた心持ちから底力が生じ、再現できない世界につながってゆく。観る者は、そこにめいめいの青春を重ねる。

この夏の甲子園は、島根代表の大山(出雲市)の中継に目を釘付けにされた。初戦で強豪・報徳学園(兵庫)を破ったのには、失礼ながら驚いた。二戦目は創成館(長崎)を延長戦で破った。そして早稲田実業(西東京)を相手に食いつ下がり、延長戦でサヨナラ勝ちした時はテレビの前を数分、動けなかった。

これには最近まで山陰に勤務した、というご縁もあるだろう。でも、県立高校に集った線の細い選手たちが、エリート校相手に、ギリギリの勝負に挑んだ。あんな果敢な試合ぶりをみせた選手が「次も勝ちたい」「感動を与えられた」と語る言葉は爽やかに響いた。

例えば齢を重ねた名優が、観衆に感動を与えたい、オスカーが欲しい、などと語ることはない。語ったところで詮無きこと、世評などコントロールできるものではない、と経験自体が知っているからだろう。

ただ、若者は少しばかり力んだ言葉を放つ方が、やはり自然ではないか。改めて、そう感じさせられる場面が身近にあった。これも勤め先が関わる事業になるのだが、先日、東京・有楽町で開かれた「全国高校生の手話によるスピーチコンテスト」の場である。一九八四年から続き、今夏も十人が思いの丈を舞台から伝えた。理の勝った印象を抱かせる人もいたが、スピーチの後に話を聴くと、こんこんと湧いてくる熱意に頷かされた。緊張のあまり、何度もスピーチがつかえてしまう人もいた。

少々古い話にはなるが、駆け出しの頃にもこの手話スピーチコンテストの出場者に取材したことがある。

高校三年生、多恵さんといった。ろう者の両親のもとに生まれ、物心ついた時には手話を身につけた。見上げるような大人に交じり、近所付き合いや学校行事の打ち合わせといった用事をこなし、父母の気持ちを代弁した。

でも、感じやすい年頃になると、そんな自分への視線が

気になった。心を閉じ、最小限の手話しか使わなくなった娘に母はこう告げる。

「ごめんね。聞こえなくて」

優しさが身に染みた多恵さんは、それから手話の腕に磨きをかけた。ある日、父が突然倒れ、病院に担ぎ込まれる。症状は伝えきれず、もどかしかった。そして心に決めた。

「手話ができる医者になる」

そのころ抱いた葛藤を「勇氣を持つて」というタイトルで発表し、厚生大臣賞に輝いた。実際に医学部に進んだという。あれから二十八年。どんなお医者さんになっただろう。

「日本を今一度せんたくいたし申候」

幕末の若き志士、坂本龍馬が胸の内を明かしたこの言葉はよく知られている。

ただ、若者が抱く熱っぽさは今も昔も変わらない。そのエネルギーは語りつくせない想いとなって感受性を養い、生きる糧になるだろう。コスバ・タイパの時代になったからといって、感動の源泉は効率的にこしらえられるものではないのだ。

鳥取が好きだ。

山下 篤美

(魔女修行中)

なることがある。

ロシアから一時帰国していた時、昼下がりの鳥取の街で水丸氏を、見かけたことがある…はず。

それ以前に、彼が鳥取について語った話をどこかで見知っていたので、山陰合同銀行の角あたりから、吉田医院方向に歩いている男性を、通りの反対から「あ、水丸さんだー」と確信した。

とはいえ、駆け寄って話しかけるほどの勇気がその時は持たず…

それで、今となっては、幻想だったような気さえしている、声をかけなかった事を、ちよっぴり後悔しているというわけだ。

だからと言って、駆け寄って行って、あの時の私に、何が話せたのかと問われたら、それも大いに困るのだが…

そんなシンプルなタイトルの本があるのを、ご存知だろうか。

作者は故・安西水丸氏。

作家・村上春樹氏の本の挿絵でも有名なイラストレーター、作家である。

そんな彼が鳥取の民藝や風土について、一見ほのぼのしているような、でもとってもスタイリッシュなイラストや写真で紹介しているのがこの本だ。

ところで、歳をとると、昔の記憶が本当のことだったのか、それとも単なる妄想だったのか、ちよっぴりと自信がなくな

因みに「鳥取手仕事出会い旅」と題した鳥取県制作の動画(2012年)があつて、その案内人も水丸氏が務めておられる。

鳥取の手仕事を支えている方々の元を訪問、インタビューしているもの。

動画は今も視聴可能なので、もし、ご興味があつたら是非。

そして、この本にまとめられている文章の執筆も、ちょうどその頃になされたようだ。

本の中には、動画の訪問先以外にも、水丸氏のお眼鏡にかなつた民藝や、好きだったという鳥取城跡の話、

更には、鳥取の民藝の父・吉田璋也氏の功績をたたえ、鳥取県の人へ「その教えを心して感じ取ってほしい」と切

に願う一文もある。

それにしても、まさか、その2年後に亡くなつてしまわれるとは…

「何かを好きだという自分の気持ちを捨てることほど罪なことはない」常々そう言っていたという紹介が、後書きがわりのプロフィールには書かれている。

「鳥取を好きでいてくださつて、ありがとうございます」

鳥取を出て、ぐるぐる回つて、再びここへ帰ってきた私。

今なら水丸氏に、そう言えたのかもしれない。

そして、今後もこの本を手元に置いて、鳥取と鳥取の手仕事を真つ直ぐに好きでいようと思うのだった。

I am the Resurrection

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

SNSで書店や出版関係のアカウントをフォローしているので、日々業界の様々なニュースを目にする。七月中旬に出版社に取り寄せ注文したのに届いたのがお盆明けだった、発売日に行つたのにどこにもない、この地域唯一の書店が閉店してしまつた、書店存続のため国が支援する、その支援って意味あるの? などなど。

本屋なので一通り目を通すが、自分には関係ないというか、距離を感じてしまう。十坪の小さな店とはいえ本屋なので、特に物流の問題に関しては無関係ではないのだが。

「ザ・資本主義の論理」で考えれば、今売れている本をたくさん仕入れてたくさん売る。粗利の高い本以外の商品を増やす。儲からなければ一番大きな経費である人件費を削る。どうにもならなければ店を閉める。正しい判断だ。前職でエリアマネージャーという立場になつた(なつてしまった)。無駄な作業を洗い出してフローを効率化する、合理主義者としての自分を前面に出した。そういう仕事は

割と得意で、かつそんなに嫌いではなかった。

「じゃあなぜひとりで本屋を始めたのか?」と問われても、正直なところ明確な答えを持ち合わせていない。

いざ始めてみて分かつたのは、ひとりでやるとオルタナティブにならざるを得ない、ということだった。アンチではなく、オルタナティブだ。十坪の店では、それほど多くの本は置けない。ベストセラーの小説やアニメ化したコミックは、需要の予想が読みづらくリスクが高い。そもそも売れている本を仕入れるのは、小さな本屋では難しい。

そうなると、世間で売れているものではなく、①買ってくれそうな人の顔が浮かぶ本と、②著者や内容で、ある程度この店なら売れるだろう本と、③自分が売りたいと思つた本、を仕入れることになる。

例えば『読書と暴動』(①)。帯に「ロシアのフェミニスト・パンク集団 Pussy Riot の創設メンバーが語る、波乱に満ちた半生とその『実践哲学』の全貌」と書かれた、なかなか尖つた本だ。よく来店される音楽好きの方に向けて一冊仕入れてみたが、開店してから三冊売れている。ちょうど売り切れた翌日に問い合わせを受けたので、本当なら四冊売っていたはずだ。

売りたい且つ売れるとは思うが高額な、③に該当する本

を仕入れたところ、たまたま鳥取に来ていた関東在住の大学生が買ってくれた。

もうひとつ、④お客さんから問合せがあった出版社の本もある。これから発売される本のことを聞かれ、そういえば面白い本たくさん出している出版社だったな、と思い出し、メールで問い合わせる。既刊含めて十五冊ほど注文した。問い合わせがあった新刊は、初回に二冊仕入れたらすぐ売れてしまい、追加で発注した。

オルタナティブといいつつ、文庫化された②の『百年の孤独』は、当店でも十冊近く売れている。

品揃えにこだわりがあるか、と問われたら、仕入れないものは明確だが、仕入れるものにはそれほどこだわりはない。本に限らず小売業は「客が店を育て、店が客を育てる」と思っているからだ。

私よりはるかにそのジャンルに精通した専門家の方や、私と関心領域があまり重ならない方から、日々たくさんものを受け取っている。

古書に関していえば、コントロールできなくともできないことがある。依頼を受けた段階で取捨選択するとはいえ、SFや七〇年代のコミックなどはそれほど明るくない。相場感や、鳥取で売れるかどうかを考えながら値付けをする。

買い取ってすぐ売れる本と誰も触っていない本があって、胃がギリギリする。商売の楽しさと難しさは常に背中合わせだ。というところで絶賛買取り強化中。当店に合いそうな本があればぜひ。

【参考文献】

『「百年の孤独」を代わりに読む』友田とん ハヤカワ文庫

『百年の孤独』読んだ方にも読んでない方にもおすすめ。

『わからないままの民藝』朝倉圭一 作品社

「民藝、わからないけどなんか良さそう」を、著者がお店を構える飛騨高山から届けてくれる、新しい書き手のエッセイ。

『クリエイティブ・コミュニティ・デザイン』紫牟田信子
+ 編集部 フィルムアート社

一〇年以上前に読んで売って、内容は忘れてしまっただけ、もう一度読み直す必要に迫られて、今読んでいる本。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (18)

村瀬 謙介

(小取舎)

お盆前に境港市へ行ってきた。妻が行きたいという夢みなどタワ一の企画展「サマーアクアリウム」で遊べる光の水族館」がメインだった訳だが、私が「いいね」と言った理由は別にあつた。以前から行きたいと思っていた境港市の本と雑貨、ギャラリーのお店「一月と六月」に行くチャンスだったからだ。鳥取県内の本屋さんの中でもちよつと独特で名前もインパクト大。インスタグラムもチェックさせていただいていた。

ある日、奈良さんにお勧めしてもらった『東京ヒゴロ』という漫画。『鉄コン筋クリート』や『花男』、『ピンポン』の松本大洋氏の作品で、漫画編集者の話らしい。「一月と六月」に入り、ぐるっと店内を二周し、角の棚の下隅に『東京ヒゴロ』全三巻を見つけた。もちろんすぐ購入。一月生まれの店主、阿部義弘さんに「定有堂の奈良さんに

お勧めされて」と伝えると、なるほどと言った顔で「いいお話ですよ。小取舎さんには特に面白いと思います」とお墨付き。小取舎を知っていたことにも感激。どうやら定有堂にはよく行っていたそうで、新しくできた SheepSheep Books さんも行ってみたいとおっしゃっていた。

さて、『東京ヒゴロ』を読む。懐かしいこの感じ。松本大洋作品の若い頃のどこかファンタジーで空想のシーンが多い作品とは違い、現代性があり渋みがある。大洋さんは今年五七歳になる。主人公の塩澤も五〇過ぎの中年男性。大手出版社の小学社を早期退職し、理想の漫画雑誌を作ろうとする編集者である。

漫画編集者が出てくる漫画はよくある。主に売れっ子漫画家を目指す若者が主人公で、編集者はバディや敵対する存在で出てきたりする。『アオイホノオ』や『バクマン。』、『僕の小規模な生活』など。編集者が主人公の漫画で、パツと思いつくのはドラマ化された『重版出来』もそうだが、何と言つても土田世紀氏の『編集王』だろう。読んでいた頃は自分が出版社をするなんてことは想像もしなかった。松本大洋氏も土田世紀に憧れていたそうだ。

一気に読みたいくらい面白いのだが、読み進めるのがもつたいたなくジリジリと読んでいた。文章と挿絵のバランスが逆になった文学のようで沁みる沁みる。特に最終巻の三巻、第二話「書店への挨拶まわり、5月」。塩澤が「なんと一冊だけでも置いていただけなかと、頼みに参ります」と言うのと担当している漫画家が「しかし今日(きょう)意味あるっちゃるか? 本屋回るやら、いにしえの営業」とと呟く。その後実際に回る本屋に「今余裕ないから」とか「結局返本になったら迷惑かかるから」とか「うちはもう文具と雑貨で商いしてるでしょ。これ以上本を置く場所は広げられない」とか、中には「取次からの通常ルート以外取引することはほとんどない」と言われても「万が一にでも興味を持っていただけるならば」とへこたれない塩澤をみていると背筋がシャンとなる。漫画家が命削ってんだから編集者も命かけて売ってくれよという松本大洋氏からのメッセージと読んだ。

鳥取県の書店の数はこの一〇年で一五件減って二〇二四年六月で六〇件。その書店全てで一〇冊売れても六〇〇部。いや、されど六〇〇部。東京都には一〇〇〇〇件近くもあるのだが、人口で割れば鳥取県の書店数も決して悪くはないだろう。などと書いても実数売れないと意味がない。

鳥取出身や在住の方が書いた本や鳥取の文化をテーマにした本を作る小取舎にとつて、一番手にとつて読んで欲しいのが鳥取に住んでいる人。誰か買ってくれても良いし、実際興味がある方は北海道や九州からでも注文があるのだが、地元の人に地元のことを知ってほしいという思いが強くある。

奈良さんが小取舎を始めた時に「鳥取では六〇〇部売れたらベストセラーですよ」とおっしゃっていた。

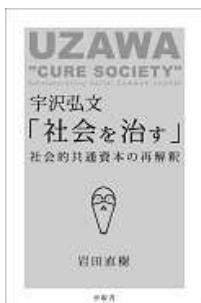
鳥取県民約五三万人の中の、本を読む方、の中の六〇〇人の手に小取舎の本が渡れば実に嬉しい。

小取舎の最新刊

『宇沢弘文「社会を治す」
社会的共通資本の再解釈』

岩田直樹 著

二〇二四年七月二九日発売



汽水のほとりから (42)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

二〇二二年二月、ウクライナにロシアが侵攻し、戦争が勃発しました。続いて二〇二三年には、パレスチナのガザ地区を支配するハマスとイスラエルのあいだで戦争が起きました。／戦争は二世紀になった今日でも絶えることなく続いていきます。いったい人間はなぜこんなにも戦争を必要とするのでしょうか? 人類学者の奥野克巳の新刊『ひっくり返す人類学』(ちくまプリマー新書)はこんな一節で始まる。著者によれば、その書名の由来は、人類学が発明したフィールドワークが我々の当たり前の日常をひっくり返す効用を持つことにあるというが、人類学は、日常どころか、人類史をもひっくり返し得る学問である。

二〇二〇年に急逝した人類学者、デヴィッド・グレーバーの遺作『The Dawn of Everything : a New History of Humanity』(邦題『万物の黎明』光文社刊)は、まぎしく

そうした内容の本だった。もっともこれは考古学者デヴィッド・ウエングローブとの共著であり、そこには考古学的知見も多く引かれるが、核となるアイデアのほとんどは人類学的知見から来ていると考えられる。なぜならば、戦争も含め、今の人類が置かれた状況は絶望的にさえ見えるけれども、その長い歴史を窺えば、我々人類は決して愚かではなく、それなりに知恵を働かせながら社会生活を営んできたのであって、そのことは人類学のフィールドワークによって今もまだなお体験的に確認することができるからである。

前掲の『ひっくり返す人類学』においても、人類学者がフィールドワークによって明らかにした狩猟採集民社会では今なお、人の上に立つリーダーが権力者になることを阻止し、それによつて貧富の格差を無くして誰もが平等に暮らすための工夫が共通して見られる点を強調している。著者は述べている。「人類はこれまで、権力が集中したり、権力の発生を未然に防いだりするやり方をすでに自前で持っていたのです。そして、地球上にはいまだに、それらのことをいとも簡単にやってのける人たちがいるのです。／逆に言えば、権力から逃れることのできない私たち現代人は、人類として、とてつもなく遠いところに来てしまっているのかもしれない。振り返れば、格差を「そもそも作らない」世界を目指した上で、権力が集中しないような

工夫をすることが、現代世界において根本的な解決の見通しが立てられない経済格差と権力の問題を解きほぐすためのひとつの大きな糸口になりうるのではないでしようか?」。資本主義社会を生んだ人類史に別の可能性があり得たこと、今後あり得ることを人類学は提示できるのだ。

乱暴に言えば、資本主義社会とは、個人の所有を前提とした社会である。故に所有欲を肯定する社会である。無論所有欲は誰にでもある。狩猟採集社会の人々にも。が、彼らはそれを肯定しない。『ひっくり返す人類学』では、著者がプナン族の幼児に飴の袋を与えた際のエピソードを紹介している。彼女はしばらく多くの飴を独占していたが、その様子を見ていた母親が周囲の子供にも分け与えるように叱りつけたというのだ。「所有とは盗みである」とアナキストのブルードンは言ったが、所有欲は悪であるというのが彼らの重んじる道徳である。且つそれこそが真に必要な教育でもある。プナン族は学校教育を重んじない。彼らは学校というものを、他人を出し抜き、貧富の格差を広げ、所有欲を肯定する装置だと思っっているに違いない。

プナン族社会にも、人の上に立つリーダーは存在する。彼らはプナン語でラケ・ジャアウ（大きな男）と呼ばれ、それは英語のビッグ・マンに相当するらしい。が、彼らは率先して周囲の人たちにモノを分け与える存在であり、「ケ

チはダメ」「寛大であるべき」というプナン族社会の根本原理を最も実践し体現した人物として周囲の人々に評価されているに過ぎない。したがって、彼らが所有欲を見せると、とたんに人々は彼をリーダーと認めなくなり、彼のもとを去ってしまうという。人の上に立つリーダーを権力者にしない仕組みはこのように維持されてきたのだ。

こうしたプナン族の社会のあり方は、私たちの社会とはすっかり無縁のように見える。が、果たして本当にそうか。我々もまた、プナンの人たちと同じように、「ケチはダメ」「寛大であるべき」ことを人の上に立つ人間に望んでいるのではないのか。政治家や教師などに尊称をつけるのは、本来そうした望みを託した表現ではないのか。ちなみに、漢語の「大人(たいじん)」が文字通りにビッグ・マンを意味するとすれば、それは「君子」と同義である。すると、『論語』の中で孔子が君子だと認めた弟子の顔を「賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪えず、回や其の楽しみを改めず。賢なるかな回や」と讚えたのは、人の上に立つ者の資質は何よりも所有欲を持たないことにあるのだと教えているように考えられる。

カレーとコメ不足

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

なんだ、またカレーの話か…と思われそうだが(笑)。

スーパーの店頭からコメが消えているという。昨年(の猛暑で収穫量が減っていたのに)に加え、インバウンドの日本食ブームで需要が増えたためらしい。9月の新米が待ち遠しいが、今年はさらに記録的猛暑だから、心もとない。

コメ不足といえば三十一年前、1993(平成5)年もひどかった。原因は今の猛暑とは正反対の「冷夏」。しかし、これが私の「スパイスカレー作り」に目覚める」きっかけになったのだ。

◇

◇

◇

この年の8月、倉吉では「倉吉農業博覧会」というイベントが開かれていた。当時の都市博ブームに乗っかって、当選したばかりの市長がぶちあげた博覧会。しかし、市の予算ではやることが限られ、しょぼいテントのパビリオン

や展示物に「どうせ失敗だろう」とささやかれていた。

「なんとか集客力アップを」という市からの要請で、私も新聞社でCCガールズのステージ(どこが農業と関係あるんだ?)や、「日本こはん党」党首を名乗る作家、嵐山光三郎さんを招いた聖火リレーと点火式など、いささかバカバカしい催しをやったものの、内心「たぶんガラガラで失敗だろう」と踏んでいた。

◇

◇

◇

ところが天の祐(たす)けか、この年の夏休みは本当に涼しかった、というより寒かった。週末のたびに冷たい雨が降り、海水浴やレジャーに出かける気にもならない。そこで外出をねだる子供を連れて「仕方ない。まあ、農業博でも行ってみようか」となる。

気が付けば農業博は、目標を上回る32万5千人の入場客で大成功。CCガールズも立ち見が出る盛況だった(笑)。市の面目は保たれたが、農業博の成功とは裏腹に、肝心の農業IIコメ作りは冷夏によって壊滅的な打撃を受けた。なんと皮肉な結末である。

穂の中に実はなく、収穫量は例年の7割台。米屋やスーパーの前に長蛇の列が並んだ。

日本米(ジャポニカ米)は古米、古々米まで底をつき、緊急輸入されたのがタイ米。ところがこのタイ米、「パサ

パサして不味い」とすこぶる日本人には悪評だった。

試しに買って食べてみると「おお、これは」と驚いた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

タイ米を含むインディカ米は炊いてもパラパラした食感で、日本米のようにドロドロ煮崩れない。「これでパエリアやリゾットを作ったら、きっと美味しいに違いない」。作ってみたら正解だった。

当たり前の話で、スペインでパエリアに使われるのはバレンシア米、シルヴァーナ・マンガノが妖艶な出稼ぎ農婦を演じたイタリア映画『にがい米』はリゾットに最適なカロナリーナ米、いずれもインディカ米の品種である。

日本人は煮崩れして膨れ上がるジャポニカ米でパエリアやリゾットを作って「本場の味だ、美味しい」と喜んでいたので。中華炒飯も、タイ米の方がパラパラして調理が楽で、美味しくできる。

やがてタイ米を使ったカレー屋を見つけた。鳥取市役所のそばにあった『アルポラン2』。粒立ったコメがサラサラのスープに浸っている。香り立つスパイスの邪魔を全くしていない。「なんだ、これは」。衝撃だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それからは、もっちりした日本米に、粘り気あるシチューのようなルウをかける従来のカレーは食べる気がしなく

なった。第一、胃がもたれる（日本の市販ルウには油脂がたっぷり入っている）。ターメリック、コリアンダー、クミン：自分で買ったスパイスを調合し、スパイスカレー作りにのめり込んだ。

ところが、である。93年のコメ不足が終わり、日本米が行き渡ると、タイ米はピタリと見かけなくなった。

時おり輸入食料品店で「香り米」として並んでいたり、最近では鳥取県でインド系の高級香り米をかけ合わせたカレー専用米『プリンセスかおり』も開発されたが、残念ながら高価で、なかなか手が出ない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

世界で流通するコメの8割を占めるインディカ米が手軽に入手できなければ、エスニックやヨーロッパの料理はまず再現できない。温暖化でコシヒカリの栽培適地はどんどん北上。代わりにもともと高温多湿に強いインディカ米を西日本で栽培し、外食産業へ売り込む、余剰米は輸出する、という手があるが、たぶん難しいだろう。

日本人はやっぱり日本米、という信仰に近い思い入れがあるからだ。「日本米は『米穀界のガラケー』なのか」。食が国際化された時代、両方食べられる方が幸せなのだが……と三十一年ぶりに巡ってきたコメ不足に思う。

大きな葛籠・小さな葛籠

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

二十代の頃は、駿河台のあの坂道を、両手に本が一杯詰まった紙袋を下げて、平気で登っていたものだった。ホテルで、宅急便の段ボール箱に詰め、翌朝、チェックアウト前に発送手続きをした。

それが、荷物を持って移動するのが段々苦痛になって、神保町内で何とかしたいと考えるようになった。

ゆうパック用のケースが販売されるようになって、ずさん通りの郵便局から、その場で荷造りし、詰め物の古新聞を局員に頼んで調達し、発送もした。

懇意の店ができる、厚かましく他店の買い物も、まとめて送ってもらうようになった

あるいは、三倉堂書店にシェア・スタイルの古書コーナー

ができ、五千円以上買うと発送サービスが利用できたので、ここでも、他店分の荷物を一緒に送ってもらうた。年を取ると、人間、段々厚顔無恥になってくる。

一方、昔も今も、古書の通販は一冊、二冊の小口発送である。名称が色々変わっているが、「書籍小包」と呼ばれていた頃、毎々、本の大きさにピッタリ合わせた段ボール梱包で送って寄越す名人芸の古書店があったものだ。今は、アマゾンのように袋に放り込むだけの(ぞんざいな)簡易梱包か、レターパックが大半である。

それでも、たまに、エアキャップで包んだ上に、少し大きめの段ボール箱に収め、隙間を新聞紙などで埋めた、丁寧な荷物が届くことがあり、古き良き古書店の美風、未だ減びず、と嬉しくなる。

海外の書店に注文すると、到着までの日数もさることながら、荷造り方法もお国柄があって面白い。

もつとも驚いたのは、フランスの出版社から、美術書を十数冊まとめて購入した時のことである。

ある夜、呼び鈴に出てみると、大きな袋を肩にかけた大黒様…ではなく、大きな布袋をふたつ抱えた郵便局員が

立っていた。

まるで家電製品が建築資材でも入っているかのような大ききで、一体、何が届いたのかと魂消したが、宛名に間違いはない。了承すると、局員はおもむろにハサミで、袋の封印をジョッキンと切り落とし、中から、大きな段ボール箱(一)を取り出したのである。

筆者の常識では、段ボール箱は外箱であり、梱包材であったから、それをわざわざ袋に入れる、という発想はない。えっ、と思ったのも無理はないだろう。

とまれ、段ボール箱二箱が玄関に積まれ、局員は丸めた布袋と共に去っていったのであった。

箱の中には、注文の本が間違いないと入っていたので、別段、文句を言う筋のものでもないのだが、何だか不得要領のまま終わったことであつた。

時日は過ぎて、ひよんなことから氷解したのが、つい先日のこと。出たばかりの鹿島茂著『パリの本屋さん』(中央公論新社)である。この中に、「サック・ポスタル・ドリブレリ」という一文があつた。

この著者も人後に落ちない古書マニアであつて、歴代の借金高は荒俣宏に次ぐのではないか、と思つているのだが、パリへ行く度に、大量の本を買う。それを、日本に送る算

段に四苦八苦する話である。

宅急便が普及していない国では、郵便で送るしかない。万事お役所仕事のフランスで、ぶうぶう言いながら荷造りをするのだが、小口でチマチマと送つては埒が明かない。氏が辿り着いたのが、表題の「サック・ポスタル」である。「書店用郵便袋」と訳され、出版社や書店が、書籍に限り、二十五キロまでを送れるという優れたもの。本を詰めた箱を南京袋(と氏は言う)に入れて送ると言うサービスである。

ああ、これであつたか、と合点した次第である。

なぜ、わざわざ二重手間にも袋詰めをするのか、それも何となく理解された。要するに、中抜き防止策なのだ。封印するのが、その証拠だろう。

実際、筆者の少ない体験の中でも、海外に発注したCDやDVDが不着事故を起こす、ということが何度かあつた。調べてもらうと、どうやら空港などで抜き取られたらしい。

こういう所は、やはり、日本に一日の長がある。

鳥取あれこれ その九十七

内田克彦（地域研究家）

永井幸次の自伝『来し方八十年』には、明治時代の鳥取から姫路・神戸方面への経路が詳しく書かれている。

まず、一八八八（明治二一）年の夏休みに、神戸の祖母を見舞う旅の記述がある。草鞋に脚絆の出で立ちで歩くことを主に出発した。当時東海道線は神戸が終点であった。

智頭、平福、三日月の宿場を通過して姫路についたのが三日目の午後四時頃で、姫路からは丁度神戸に帰る車があるってそれに乗った。

帰りは、次の記述の通りである。

祖母の好意の車に乗って出発し〔略〕姫路につき、また車で三日月宿についてここで一泊した。〔略〕その翌日朝早く、また夜の明けないうちに出発して鳥取に帰る予定で急いだが、山陰山陽の国境に行くまでに五つの坂があり、昇り一里下り一里という長い坂もあった。国境の『駒がえり』の坂では牛を備い、牛に車を引かせて越

したが、昇り坂が多いので相当車夫も疲れたらしい。それでも元気な男で頑張り通して夜十時頃に宅に無事ついた。

次いで、一八九二（明治二五）年八月に、東京音楽学校の入学試験を受験するために上京したときの記述である。午前四時に自宅を出発し、智頭宿で昼食後出発した。

国境「駒がえり」の麓で牛を備い、牛に車をひかせて登る。因幡と美作の国境である頂上に達すると牛を車から離して降り坂を下っていく。

坂根宿を経て平福宿で宿泊。朝四時に起床し、佐用宿を経て、三日月宿で昼食。千本、鷲崎、龍野、太市、高岡の各宿場を通過して、姫路に着いたのは六時で、四時の上りに間に合わなかった。駅前の旅館に泊まり、明朝五時の汽車に乗り込み、東京（新橋駅）着は午後十時過ぎである。

そして、翌年七月に、予科修了証書をお土産に帰省したときは、出発する数日前にハガキを出していたので、待っていてくれた加古川駅（何故か姫路駅ではない。）から車に乗り、平福宿に一泊し、翌朝四時に出発して夕暮れ時に

鳥取に入っている。

同年九月六日早朝、東京に帰るときの車夫の言である。

「今度は龍野駅から汽車にのって頂きます。三日前から開通しました。行く行くは上郡駅で乗ることになります。よう。そうすると大分近くなりますから、朝三時に発てば一日で東京へ行けるようになります。」

一八九五(明治二八)年四月に上郡駅が開業すると、専ら小郡駅が鳥取までの始発点となる。『上郡町史第二巻本文編口』(二〇二一年)に次の記述がある。

姫路―岡山間が開通した明治二四年(一八九二)当時には、現在の上郡駅は設置されていなかった。このため、有年―三石間に上郡駅を新設する運動が起り、ついに二七年二月に設置され、二八年四月から営業が開始されることとなった。〔略〕当時の駅前の情景は、上郡駅に降車した人々が競って人力車に乗る姿であったと思われる。明治三二年(一八九八)には駅前に二九人の人力車が待機していた。

『山陽鉄道案内』(一九〇一年)の「上郡駅」の項には、

次の記述がある。

因州鳥取に至らんには当駅にて下車するを便なりとす鳥取は戸数七千四百六、人口三万九千八百八十九回國第一の都会なり距離廿五里人力車賃二四十二錢、当日着二円十六錢

いろいろな人物の旅行記などを調べれば、当時の実態をうかがうことができる。例えば、井上円了の「南船北馬集第五編 鳥取県紀行第一、因幡の部」(『井上円了選集第一三巻』)では、次の記述がある。

明治四十三年四月三日。播州佐用郡より作州英田郡を経、山陰山陽の背骨と呼ぶる一帯の高嶺中、志戸坂峠をこえて、鳥取県因幡国八頭郡に入る。嶺頭、道険にして車進み難し。ときに牛をして先引きをなさしむ。これ当地の名物とす。

なお、一八九二(明治二四)年五月の「館主巡回日記 鳥取県因幡、伯耆」(『同第二巻』)では、「ただちに村岡を去りて因州に向かい、午後五時、鳥取市に着す。」との簡略な記述にとどまっている。二〇二四、八、一三二

内坪井町日記

(4)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

八月某日

妻がタイのマッサージュ学校に通うために十二日ばかり長男次男と留守番。子どもと過ごすだけなら平気なのだけど、仕事の都合で早朝に保育園にやったり、時間内に迎えに行ったりするのがたいへんだった。夕食もなかなか自炊ができず、不健康な外食が多くなってしまった。すぐスシローとかくら寿司とかリクエストしてくるし。早く主夫になりたい。

妻が帰ってくるまであと半分という日に、仕事中に具合が悪くなり、保育園のお迎え後に帰宅して検温したら三十九度ほどの発熱。さすがに子どもを見きれないかとも思いい母親に電話して助けを乞うたら「だからそんなの(渡タイのこと)やめときなさいと言ったでしょう。」と言われた。事前に報告もしていたし、妻を悪く言われたように感じて腹が立ったので「では結構。」と電話を切った。子どもたちに「おとうちゃんは気絶しそうだから、早く寝る準備して寝よう」と伝えたら意外と素直に言うことを聞いてくれて、早めに就寝。

翌朝、子どもを保育園にやったのち、病院へ。腹も下していたので、腸炎かもねと医者に言われエコー検査。腸が腫れているらしい。お腹の薬だけもらって帰宅。自覚としては絶対に仕事のストレスのせい。

食べるとすぐに下してしまうので、しばらく絶食することにした。栄養のありそうな飲み物だけ揃えて(と言ってもオレンジジュースとかりんごジュースとか。あと初めて万田酵素ってやつを飲んでみた。これが美味かった。)、十日ばかり断食にトライ。その間に妻は帰ってきたが、帰ってきた妻も疲れからか帰国後すぐに数日発熱。踏んだり蹴ったりで仕事もろくにできない数日間を過ごす。

十日経った頃には六キロ痩せていた。今の仕事についてから菓子ばかり食べていたので五キロほど体重が増えていたのでいいダイエットだった。食事してない分ふらふらしていたが、体が軽くなって肩こりとか腰の疲れとかは軽減されているように感じる。この体重を維持して体力を取り戻せは調子が良くなれる気がする。

八月某日

体力の落ちたまま無理して仕事をしていたら数日後にま

た発熱。今度は四十度を超える。翌朝病院で検査したがコ
ロナでもインフルエンザでもなかった。腸炎が再発したの
だろうか。熱は1日で下がったが、とにかく体力がない。
今度は抗生剤を処方してもらう。

八月某日

なんとか持ち直し、神戸へ。ヘラバラウンジにてライブ。
ヘラバは十九周年とのこと。すごい。週末だけのオルタナ
ティブスペースを二十年近く維持してきた店長はえらい。

ヘラバに我々が初めて呼んでもらったのが十年前。毎回
DJをしてくれてる真野さん（大先輩）と、十年経ったん
か、あつという間やな、歳くったなーと談笑。

対バンもかっこよく、我々も無事に演奏。相変わらずの
やじを頂戴し、ありがたい。ボーカル二人が風邪気味だっ
たので翌日のライブに備えてライブ後は早く帰ろうと思っ
ていたが、真野さんの選曲が素晴らしすぎて、結局終演後
も2時間近く最後まで踊ってしまう。

例によって四人部屋に帰り、すぐ就寝。くたくた。

八月某日

ゆっくり起きて元町の喫茶店「エビアン」で朝食。ずつ
とコーヒーもやめていたが解禁。うまい。くつろいだのち

大阪へ出発。

会場はムジカジャポニカ。ジョンソン t s u バンドとの
ツーマン。題してダブルジョンソン祭り。ジョンソンバン
ドはギターボーカル、バイオリン、アコーディオン、ドラ
ムの四人編成。コーラスワークと、アレンジ、バイオリン
のアグレッシブなソロ、ギターフレーズ、ドラミング、ア
コーディオンの懐の深さ、どれもすごかった。めちやくちゃ
変な曲を、構成も忘れたわと言いつつも呼吸で合わせて
やり切っていたバンド力があつた。

会場の音響がたいへん良く、我々も快適に演奏。アンコー
ルをたくさんいただいたが、前二人の声の調子が（昨晩踊
りすぎて）悪く、2曲にて終了。終演後おいしい食事もい
ただく。

痩せすぎた影響か会場の空調が寒すぎて震えてきたので、
明日も早朝から出発して出勤のため先に暇乞い。一人で宿
に帰って眠る。皆が寝てる中、早起きして出勤。しんど。

八月某日

台風が近づいてきている。月末の名古屋でのライブ、
飛行機が飛はないのではなからうか。どうしたものか。抗
いようもないので考えても仕方ないか。でも考えちゃう。

それはドラマの話？

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

二〇二四年も半分以上の時間が過ぎた。

そんな二〇二四年、大河ドラマは『光る君へ』である。主人公は、『源氏物語』の作者として知られる紫式部だ。平安時代が大河ドラマになるなんて、数年前の私には想像もつかなかった。さまざまな衣装・装置を使うこととなる大河ドラマにおいて、十二単や貴族の装束は他の時代から浮いており、考証や準備が難しい。

一応、二十代なので、配信ドラマも観ている私だが、子供の頃から大河ドラマ好きなのである。(一)まで書くこと、渋い趣味に思われるだろう。いつか平安時代の大河を観れたなら、とも思いつつ、合戦やわかりやすい明治維新の物語と違い、なかなか扱われる時代でないことは覚悟していた。人気がない、コケるとも言われている。

が、私にとって最初に日本の歴史に興味を持つことに

なったきっかけは、紫式部である。

私の本を読むようになったのは、漫画伝記の本を読み始めたことが始まりだ。ナイチンゲールを読んでから、私は、女性が主人公となるような伝記作品を手当たり次第に読み始めた。その一人が、世界に名を残す長編小説『源氏物語』を書いた紫式部だった。

早々と漢文の知識を身につけ「お前が男だったら」と言われる紫式部。職場でうまくいかない紫式部。自らの筆で自分を支える紫式部。そんな彼女が使える彰子。若くして帝に嫁ぐことになり、その後、国母となる女性を、式部の視点から崇めるようにみていたと思う。

しかし、本名も明らかでない紫式部の人生は、彼女一人の人生だけで本になることばかりではなかった。並べ称されるのが、清少納言である。

その二人の違いを鮮やかに捉えた山本淳子氏の『源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり』（朝日選書）は中学生の私にとって衝撃の一冊となった。

かたや歴史の敗者とも言える藤原定子に仕え、その明るい時代を随筆『枕草子』で伝えた清少納言。一方で、歴史の勝者となり、二人の帝の母となった藤原彰子に仕え、悲劇的な長編小説『源氏物語』を描いた紫式部。女性研究者

の視点から一条帝の後宮を見つめ直すことで、史実と物語に重なりが見えてきた。

二人が宮廷に使えた時代には違いがあり、個人的な接触はなかったと考えられているが、大河ドラマの中では、清少納言すなわち「ききょう」と紫式部「まひろ」が互いの才能を認め合い、交流する様子が描かれる。そして、二人は次第にその創作の方向性に違いを見出し、いく。悲しい現実の中で、少しでも明るく現実を映し出したい「ききょう」と、影もあればこそ人であると感じ、物語を生み出す「まひろ」。ドラマの中では、彼女たちの女主人の姿も対照的だ。かたや、明るく振る舞う少女時代に登場し、帝を導いて、亡くなっていく才気あふれる定子。自らの運命に翻弄され、まだ意志が見えず、言葉の少ない彰子。ドラマの中では、紫式部がようやく執筆活動を始め、藤原彰子に仕え始めることになったのが、八月だ。

多くの登場人物の名前が、それなりに平安時代にもありそうな呼ばれ方をしている中で、「まひろ」＝紫式部、「ききょう」＝清少納言という名前は、目立つ。実際、彼女たちの本名は伝わっておらず、紫式部には「香子」という名前の説もある。が、今作ではそのような名前は取られていない。それはあえて、彼女たちが「創作上の存在」である

ことを強調しているように思う。

近年、インターネットなどの発達も相まって、ドラマの視聴もSNSとの盛り上がりに合わせてられることが多い。大河ドラマ最大の難所は、「時代考証」である。「明治時代にそんな言い回しがあるか?」「戦国時代にその武器はあり得ない」など、素人から玄人まで、さまざまなツッコミの嵐だ。

そんな中で言うところ、この平安時代は、多くの人がツッコミ慣れしていない時代ではある。一方で、貴族の男女は分け隔てられていた時代と考えられており、主人公「まひろ」と道長の恋愛模様は、史実では考えにくい。

が、作者が「まひろ」と名付けた時点で、これは紫式部を題材とした一年間のフィクションなのだという宣言のように私は受け取っている。誰もが知っている歴史的事実をアレンジし、どう現代の視聴者にも伝わる物語にするかが、製作陣の腕の見せどころなのだ。

そうして、子どもの頃、一人で楽しんでいたはずの一条帝後宮の物語を多くの人と分かち合って、なんだか嬉しいような恥ずかしいような日曜日を過ごしている。

今年こそ、『源氏物語』を読みたい。残り三ヶ月。

夏のいきものがかり

あきの素生

(くうねるめがね)



めだかたちが順調に育っている。なんとなく、親たち(第一世代)がいなくなつたときに針子だつた子たちを第二世代、卵だつた子たちを二・五世代と名付けている。第二世代たちは、早くも産卵を始めた。第一世代に孫が…という思い半分、もう半分は、めだかの生命力、繁殖力に舌を巻いている。けんかしているように見えたのは、なわばりやえさを巡る争いだけでなく、恋の鞘当てでもあつたようだ。

そんなことを書いていたら、もはや二・五世代も産卵し始め、つい先日、第三世代が孵化した。慌ただしく泳ぐ子群れることなく静かに泳ぐ子、幅を利かせる子、体が大きいのに、小さい子に追いやられるおとなしい子など、みな個性があり、見えて飽きない。水の中をゆらゆら泳ぐ姿は涼しげで、この猛暑にひとときの癒しをもたらしてくれ

めだかの生態はもちろん、水草や底砂、濾材、タンクメイト、微生物についてなど、様々なことが気になり調べてきた。その中で学んだことのひとつに、水槽の立ち上げがある。水槽の中で、バクテリアによる有害物質の分解や変換のサイクルができあがることだ。水換えをしたのに、すぐに水が白く濁ったり、油膜が張ったりすることを不思議に思っていたが、このサイクルのことを知り、合点がいった。そして、ある日突然訪れる、濁りや油膜がなくなり水が透きとおつた状態、「水槽が立ち上がる」という経験に、一種のカタルシスを感じ、癖になつた。立ち上がった水槽の水は見惚れるほど美しく、中のめだかや水草をクリアに見せてくれる。放つておいて維持されるものでもないのに、サイクルを壊さない水換えを意識して、こまごまとお手入れしている。

とはいえ、どうしてもガラスや水草に苔が生えてくるので、お掃除生体と呼び習わされるタンクメイトのうち、ヒメタニシとミナミヌマエビをお迎えした。ヒメタニシは比較的導入が簡単で、水質浄化能力が高い。らしい。ある程度放つておいてもよいうえ、いい仕事をする頼れるやつだ。一方ミナミヌマエビは繊細で、飼育が難しい。でも、彼らが小さい手(?)をちよこまかと動かして苔を食べている様はとてかわいらしく、なんとかかよい状態で過ごしてほ

しいと水質や水温に気を配っている。調べていると、ミナミヌマエビに最適なpHなどの情報が出てきて、学生時代以来ではないかというくらい久しぶりに見かけた単語に「ペ、ペーハー！」と慄いている。めだか沼は深い。

めだかだけではなく、今年は数年ぶりにバジルを育てている。と言っても、種まきの時期を逃し、よい感じに育った鉢植えを買ってきて、たまに水をやっているだけだが。バジルは好きだ。食べるのはもちろん、あの香りを嗅ぐだけで幸せな気持ちになる。数あるハーブの中でも、いちばん好きな香りだと思う。毎年のようにペランダで育てていた頃、鉢に残った前年の枝を捨てるときに、その枯れた枝すら香ることに驚いた。

いろんな食べ方を知っているわけではない。いつだって、トマトやチーズと合わせるだけだ。最も気軽な食べ方は、食パンにスライスしたトマトとバジルを並べ、オリーブオイルと塩こしょうを少々。とろけるチーズをのせてトースターで焼けば、いつものトーストよりぐんと満足度の高い朝食になる。

みじん切りの玉ねぎとにんにく、鷹の爪、ベーコンをじっくり炒め、トマト缶とコンソメの素を入れて軽く煮込む。

そのトマトソースをパスタにからめて皿に盛り、ちぎったバジルとチーズで仕上げると、いかにもおいしいそうなトマトパスタになる。

スーパーでフレッシュバジルを買ってきてもいいのだが、いっぺんに食べ切るほどは使わないし、凍らせる間もなくだめになったりするので、鉢植えから必要な分だけ拝借するのが一番おいしくバジルを味わえるな、と再確認している。

小学生の頃、生き物係は人気で、担当できたことがない。今存分に、生き物係を堪能している。



下の見あげた
写し鏡の異空間 (20)

イラスト あきの素生

岩田直樹「再解釈」論



奈良 敏行

(定有堂 主人)

二冊目の著書、『宇沢弘文「社会を治す」―社会的共通資本の再解釈』が七月二十九日に刊行された。出来立ての本を運んできた小取舎の村瀬謙介さんと一緒にサインをお願いした。岩田さんが「何と記そう?」というのと村瀬さんがラインをたくさん引いた自分の本を取り出して、これがいいですと示した。「生活に価値を与えるのは行動である。」(P.243) わたしの名前と一緒にこの文言を書いてもらった。

じつは単純な文言ではなく、この後には「倦怠や怠惰には、人間は満足できないだろう。」と続く。カント哲学への疑義なのだ。この「行動」は進歩という物語を無限に終わらせない袋小路なのである。だからユートピアを志向する進歩(行動)は留まるところを知らない虚構で、この矛盾の場所には何か補填するものが必要となる。この補填が「再解釈」なのだ。

長年にわたり思索された岩田哲学は、前著をまとめるあたりから「再解釈」という方法論を提示しはじめた。多くの読者が関心を寄せる概念でもある。

この度の著書では、再解釈とは何かという多くの人の問いに答えて、ガダマーの「地平の融合」という概念を援用してみせている。

《地平の融合とは、過去の地平に取り囲まれるテキストから現在の地平にとって重要と思われる問題意識を読み取り解釈する過程、すなわち過去の地平と現在の地平が重なり合う過程である。》(P.14)

わたしはこの「重なり合い」が「再解釈」の方法論だと考える。

宇沢弘文はフリードマンらの新自由主義と闘った人間だ。そこに重ね合わせたものは「社会的共通資本」だ。自然環境や社会環境を経済理論の中にどう取り込むかという課題の追求だ。「経済は社会に埋め込まれている」というのが結論だ。換言すれば経済の外部に社会や環境があるという発見だ。そこにはヴァナキユラーとも呼ばれ、互酬ともいわれる市場原理や交換の形式から外れているもの存在がある。この外部(「あいだ」)を補完するのが「再解釈」だ。

カントの矛盾にも補完が必要だし、宇沢の環境を取り込

もうとする思想にも補完が必要だというのが岩田直樹「再解釈」論なのだと思う。

補完という作業に用いられるのが「現象学」である。行動は線的に未来へ向かい着地する場所を知らない。つまりこの「行為」をノエマなきノエシスの行為ととらえる。この先に価値というノエマを生活に与える結末があれば、それは幸いなのであるが、虚構のユートピア思想だと断裁する。

このノエシス的な「行動」をさらにメタノエシスとしてとらえるのが岩田直樹哲学なのではないだろうか。この現象学理論は、長年研究し続けた廣松渉の「四肢的な構造連関」と重なるものがないだろうか。現象の二重性と認識主体の二重性を重ね合わせるものだ。この理論を「融合」の方法として「再解釈」の方法論としたのかもしれない。

岩田氏は「音信不通」に「洋上での転向」というシリーズを書き続けている（全十回予定）。地球物理学を専攻していた院生の時代に海洋調査船の上で、突如文転するきっかけに出合ったという話だ。「何があったんですか？」と聞いたら、「夜明けの星々を見ていたら何か身体感覚として思索の蝶番が外れた」という意味のことを語ってくれた。後に「メルローポントに深く傾倒していた時期があった」と述べるが、「身体感覚」がそれまでの思索に「補完」す

るものとして発現してきたということとは重要だと思う。

わたしは今回の本を読んでいて、思索の転回を与えたものは、星々でなく、じつは海洋だったのではないかと想像するようになった。理系の学びは例えていえば「条理空間」の数値化できるものであり、果てしない海洋の広がりには身体感覚を変成して現れたのは「平滑空間」だったのではないだろうか。そこには指標もなくもちろん数値化もできない生成変化の驚きがあったはずだ。これはドゥルーズの人間の外部へ出ようとする概念装置だが、ドゥルーズは「構造自身が生動的に生成する」ともいう。これは「四肢的な連関構造」と近い発見ではないだろうか。

宇沢弘文の「社会的共通資本」に補完する概念を挿入したのがこの本の方法論なのだが、それは「あいだ」という概念だ。しかし、新自由主義と自然環境を両立させるという意味ではなく、ここでの「あいだ」は外部にあるのだ。市場原理や交換の形式から外れているもの、つまり互酬というものが必要になってくるといふことを警鐘しているように受取った。

2024.08.05

ご案内



ドラメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

9月19日 木曜日 19時から

テキスト 関口正司『ハイチ革命―奴隷たちがぎりひらいた近代』岩波新書 会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇ 定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

10月10日 木曜日 19時から

テキスト 浅田彰『構造と力』中公文庫(前回続き)
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

◇ 定有堂教室「読書室ビオトープ」

9月5日 木曜日 19時から

テキスト

多和田葉子『地球にちりばめられて』講談社文庫

会場 とりぎん文化会館 小会議室

太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所
毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア
・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア
講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)
三段 公認B級指導員(みちる教練)

・編集後記:

猫を看取って、その次はおとむらい。真夏とあつて急がなければならぬけれど、まだ週は始まったばかり。会議の迫るこの週は日中どうしても時間が取れない、どうしたものか…と困ったけれど、世の中には色々なサービスがあるので。小雨の降る午前五時、無事見送ることができました。骨壺カバーを似合うものに、とこだわる自分に、思わぬ一面を発見した気分です。自分の小物にはとこだわりのないのにね。

ドラメリア(編集長)

「定有堂教室」講師の岩田直樹さんの新刊が刊行。『宇沢弘文「社会を治す」社会的共通資本の再解釈』小取舎 2024.7 十二月十七日(火)にこの本の読書会を開催します。県民文化会館小会議室 十九時から。定有堂ビル二階の「SHEEPSHEEP BOOKS」にて販売中。

奈良敏行(発行人)